

なぜこうも居場所が求められるのか

アフターコロナ時代の子ども食堂のあり方を求めて

目黒 紗季子

序章 コロナ禍と子ども食堂

強力な社会的インフラが存在すると、友達や近隣住民の接触や助けあいや協力が増える。ぎゃくに、社会的インフラが衰えると、社会活動が妨げられ、家族や個人は自助努力を余儀なくされる。社会的インフラは決定的に重要なものだ。ローカルな対面交流（学校やプレイグラウンドや地元のレストラン）は、社会的な生活の基本になる。健全な社会的インフラがある場所では、人間どうしの絆が生まれる。それは当事者たちがコミュニティをつくろうと思うからではなく、継続的かつ反復的に交流すると（とくに自分が楽しいと思う活動のために）、自然に人間関係が育つからだ（エリック・クリネンバーグ 2021：19）。

2022年は、子ども食堂を名乗る場所＝活動が、この日本に誕生して10年になる年である。そして、コロナ禍に突入して3年目を迎える。本稿は、愛知県内の約20か所の子ども食堂を対象としたインタビュー調査と、名古屋市緑区「かたろう食堂」への長期の参加経験をもとに、コロナ禍が子ども食堂にどのような影響を与えているのかを明らかにする。とりわけ、子ども食堂の誕生時には、一堂に会し、食事する会食型が主流であったが、コロナ禍以降は食材を配布する活動形態に変化している。これにより、子ども食堂が本来持っていた居場所としての機能にどのような変化が生じているのか、また、コロナ禍後の居場所機能を高めていくためにはいかなる方策が必要であるかを提示してみたい。

昨今のコロナ禍の流行により、三密を避ける生活、マスク生活、移動制限など、私たちの生活は変化を余儀なくされた。コロナ禍は子ども食堂にも大きな影響を与えた。具体的には、活動の休止、密を避ける活動形態への変化などである。一方で、2021年10月、コロナ禍による私たちの生活の変化は、大きな局面を迎えた。いわゆる「アフターコロナ」「ウィズコロナ」時代である。子ども食堂も大きな局面を迎えた。その様々な状況に対応するため、子ども食堂は、活動形態を多様に変化させてきた。

子ども食堂の形態は多岐にわたるが、大きく6つに分けられる。①会食型、②配布型、③外遊びなどの交流型、④学習支援型、⑤相談会型、⑥イベント、農業などの体験型である。コロナ禍前は、①会食型が主流であり、そこに③交流型、④学習支援型、⑤相談会型、⑥体験型を組み合わせる食堂がほとんどだった。しかし、コロナ禍が始まった2020年4月には、お弁当や食材を配布・宅配する②配布型が46.3%、①会食型が10.0%、休止・延期が38.5%となった（NPO法人全国こども食堂支援センターむすびえ 2020：2）。

子ども食堂の目的は大きく2つに分けられる。一つが「子どもの貧困対策としての支援の場」、もう一つが「子どもを中心においた様々な地域住民の居場所」である（権法珠ほか 2021：1）。コロナ禍前は、ほとんどの食堂が貧困対策と「居場所」として機能していた。子

ども食堂のはじまりと機能について次のように書かれている。「子ども食堂は、貧困や孤食などが社会問題となる中で、地域の子どもやその親らを対象に、無料または安価で食事を提供する民間発のボランティアな取り組みである。…大人も含めて誰でも集える地域の居場所になっている。見知らぬ子どもから子育て中の母親、高齢者までが集い、家族機能のシンボルのような「食」を共にする子ども食堂」(成元哲ほか 2020:114)。しかし、コロナ禍になり、多くの食堂が、活動形態を①会食型から②配布型に切り替えたことにより、居場所として機能することが難しくなった。①会食型の子ども食堂は、いわゆる3密を作り出す活動だからである。一方で、居場所として機能するように活動形態を変化させた食堂もある。

居場所とは何だろうか。川崎市の子ども権利条例の第27条には、「子どもの居場所」について、次のように書かれている。「子どもには、ありのままの自分であること、休息して自分を取り戻すこと、自由に遊び若しくは活動すること又は安心して人間関係をつくり合うことができる場所(以下居場所という。)が大切であることを考慮し、市は、居場所についての考え方の普及並びに居場所の確保及びその存続に努めるものとする」。また、大澤朋子氏によると、居場所とは、「自分の身体が生きて存在する物理的な「場」であり、かつ他者との相互承認の「関係」が存在するところ」(大澤朋子 2019:63)である。もちろん、居場所とは、このような言葉だけで表しきれものではないが、いずれも、物理的な居場所だけでなく、心理的な居場所としても機能する場所であることがわかる。

ここで、①会食型、③交流型、④学習支援型、⑤相談会型、⑥体験型を行っている食堂を居場所として機能している食堂と定義し、アフターコロナの活動形態の可能性について明らかにしたい。また、筆者が継続して参加している参「かたろう食堂」に焦点を当て、居場所として機能するための要因を分析する。なお、今回の調査は2021年6月から2021年12月まで、Zoomを用いたインタビュー調査で、三重県桑名市、愛知県名古屋市、豊田市、日進市、一宮市、岡崎市、尾張旭市で活動する約20の子ども食堂から回答を得た。また、筆者が継続して参加している「かたろう食堂」に対面でインタビューを行うことができた。これらのインタビュー結果を参照しつつ、本稿では「かたろう食堂」の活動形態の変化を中心に検討する。

第1章 かたろう食堂の活動形態の変化

かたろう食堂は、名古屋市緑区にある、NPO法人かたひらかたろうが運営する子ども食堂である。子ども食堂の活動は、2018年6月から始まった。かたひらかたろうは、子ども食堂を行う前は、月に1回地域の高齢者の方とごはんを食べたり、市からの委託事業で未就学児の子育て支援を行ったりしていた。しかし、小学生から高校生までの子どもたちと関わりがないことが気になり、そのとき話題になっていた子ども食堂を開催することにした。コロナ禍以前は、月に1回、①会食型の子ども食堂を開催していた。1日の流れは、お昼の時間まで室内で遊ぶ。そして、お昼ごはんを食べた後、近くの公園で外遊び(③交流型)をしたり、室内で遊んだりする。2020年2月まで、この形態で活動をしていた。

以下は、コロナ禍以前のかたろう食堂の活動形態と食事のメニューである。

年	月	活動形態	メニュー・内容
2018	6	①会食型と③交流型	豆たっぷりカレー、すいか、メロン
	7	①会食型と③交流型	人参ごはん、お味噌汁、粉吹き芋、とうもろこし、ゼリー
	8	①会食型と③交流型	すき焼き丼、お味噌汁、ゼリー
	9	①会食型と③交流型	とりそぼろ丼、沢煮椀、チューベツト
	10	①会食型と③交流型	カレーうどん、豆蒸しパン、じゃがりこポテトサラダ
	11	①会食型と③交流型	さつまいもしらすごはん、豚汁、柿、ラスク
	12	①会食型と③交流型	ミートスパゲッティ、スコープケーキ
2019	1	①会食型と③交流型	雑煮、きなこもち、あんこもち
	2	①会食型と③交流型	野菜スープ、チキンソテー、白菜漬物、ごはん、チョコバナナ
	3	①会食型と③交流型	ちらし寿司、すまし汁、ジャーマンポテト、ゼリー、ひなあられ
	4	①会食型と③交流型	ハンバーグ、蒸し野菜、トマト、ごはん、五目煮豆、ゼリー
	5	①会食型と③交流型	肉うどん、温野菜サラダ、トマト、ゼリー、ちまき
	6	①会食型と③交流型	焼そば、蒸しじゃがいも、すいか、蒸しパン
	7	①会食型と③交流型	炊き込みご飯、お味噌汁、ハッシュドポテト、トマト、きゅうり、ゼリー
	8	①会食型と③交流型	ひき肉夏野菜丼、ベイクドかぼちゃ、トマト、なす、すいか、チューベツト
	9	①会食型と③交流型	ミートスパゲッティ、かぼちゃ、ゼリー、白玉みたらしだんご
	10	①会食型と③交流型	ハヤシライス、もやし、きゅうり、人参和え物、カボチャ煮、ミニトマト、ゼリー
	11	①会食型と③交流型	さつまいもしらすごはん、冬瓜煮、お味噌汁、こんにゃくゼリー
	12	①会食型と③交流型	ホットドッグ、野菜スープ、オープンポテト、ゼリー、りんご、みかん、ケーキ
2020	1	①会食型と③交流型	カレーライス、ブロッコリー、トマト、おもち
	2	①会食型と③交流型	豆乳スープ、パン、ソーセージ、チョコとマシュマロのオープン焼き

2020年3月には、室内で過ごせず、食事提供ができないので、①会食型を休止し、寄付で頂いたり、購入したりしたパンとジュースを配布した(②配布型)。急に学校が休校になり、子どもたちが昼食を食べられなかったり、一人で食べたりしている子がいるのではないかと考え、パンを配布した。また、休校になり、子どもたちがどうしているのか気になり、春休み期間中に「外遊び応援隊」を結成し、午後から外遊びの時間を設けた(③交流型)。大人の事情で休校になり、我慢を強いられている子どもたちの発散の場になってほしいという思いからだった。かたろう食堂の運営者の方へのインタビューでもこのように語っている。

「子どもたちが、急に学校が休みになって、どうしているのか気になり、「外遊び応援隊」

とって、外遊びの時間を午後から設けて、春休み中やったんだよね。そこで、子どもたちが発散できるというか、我慢、我慢で、大人から勝手に決められた休校措置の中で、子どもたちが自由に遊べる場所と時間を作った方がいいとなってやった。」(かたろう食堂の運営者の方への対面インタビュー、2022年1月13日)

年	月	活動形態	メニュー、内容
2020	3	②配布型	パン、ジュース配布
	4	②配布型	パン、ジュース配布
	5	②配布型と③交流型	パラシュートキット配布、外遊び
	6	②配布型と③交流型	お弁当、ジュース配布、外遊び
	7	②配布型と③交流型	はつか大根セット配布、外遊び(水遊び)
	8	②配布型と③交流型と⑥体験型	くじ引き大会、外遊び
	9	②配布型と③交流型と⑥体験型	ラスクとおもちゃ配布、外遊び
	10	②配布型と③交流型と⑥体験型	ハロウィンのお菓子配布、外遊び
	11	②配布型と③交流型と④学習支援型	みたらし団子配布、外遊び
	12	②配布型と③交流型と④学習支援型と⑥体験型	クリスマススタンプラリー
2021	1	②配布型と③交流型と⑥体験型	福笑い、外遊び
	2	②配布型と③交流型と⑥体験型	豆まき、外遊び
	3	②配布型と③交流型と④学習支援型と⑥体験型	グミ配布、外遊び
	4	②配布型と③交流型と④学習支援型と⑥体験型	ブーメランキット配布、外遊び
	5	②配布型と③交流型と⑥体験型	トマトの苗植え替え、外遊び
	6	②配布型と③交流型と④学習支援型と⑥体験型	プチマルシェ、外遊び
	7	②配布型と③交流型と④学習支援型と⑥体験型	水でっぼう配布、外遊び
	8	②配布型と③交流型と④学習支援型と⑥体験型	夏祭り、外遊び
	9	②配布型と③交流型と④学習支援型と⑥体験型	ポケモンスタンプラリー、外遊び
	10	②配布型と③交流型と④学習支援型と⑥体験型	音楽を楽しむ、埴輪づくり、外遊び
	11	②配布型と③交流型と④学習支援型と⑥体験型	福引き大会、外遊び
	12	②配布型と③交流型と④学習支援型と⑥体験型	アドベントカレンダー配布、外遊び
2022	1	②配布型と③交流型と④学習支援型と⑥体験型	飴配布、お正月遊び

(2020年3月4月の第一土曜日の活動時は外遊びはなかったが、春休み期間中に外遊びを行った。)

お菓子や食材の配布などを行い、もらった子から、希望者は近くの公園で遊ぶという流れである。配布をする際も、ゲーム形式にするなど、交流の時間を大切にしている。近くの公園には、遊びの道具を持っていき、みんなで遊んだり、各々遊んだりしている。年齢・性別を超えた交流もみられる。

また、フードパントリーを2020年9月から始めた(②配布型)。かたひらかたろうの活動理念が「多世代交流の場」であり、30世帯限定だが、すべての人を対象にしている。この活動は、浦里学区と片平学区の2か所で行っている。さらに、学習支援を2020年の11月に

始めた（④学習支援型）。遊びきっかけではなく、勉強きっかけで足を運んでくれる子が増えるのではないかという思いからだった。そして、2022年1月から、毎週木曜日に外遊びの時間を増やした（③交流型）。

このように、かたろう食堂は居場所として機能するように活動形態を変化させてきた。次章では、なぜ、かたろう食堂が居場所として機能しているのか、その要因について分析を行う。また、ゼミ活動でインタビューさせてもらった20の子ども食堂（内1か所はかたろう食堂）についても分析を行う。

第2章 居場所として機能するための諸条件

1節 開催場所

かたろう食堂は、借家で、子ども食堂（食材配布、外遊びなど）、フードパントリー、学習支援活動を行っている。そのほかにも、名古屋市の委託事業である子育て支援、未就学児の外遊びの会などを行っているため、子ども食堂などの活動時以外にもスタッフが常駐している。この「スタッフが常駐している」ことが居場所として機能することの一つの要因であると考えられる。

ゼミでインタビューした子ども食堂の1つに、週5日、自社の飲食店で、①会食型の子ども食堂を行っている「子ども食堂 Q chan」(キューちゃん)というところがある。この食堂は、かたろう食堂と同様、食堂開催時以外にもスタッフが常駐している。ある日、いつも参加している男の子が、鍵を忘れたまま学校に行ってしまい、家に入れられないということがあった。学校が終わった後、その男の子は迷わず、その食堂に来た。仕事が終わりに、男の子が鍵を忘れたことに気づいたお母さんも迷わず、その食堂に来た。示し合わせたわけではないが、男の子もお母さんも、困ったときはその食堂だと思い、無事、再会することができた。これは、子ども食堂が居場所として機能している一例である。このように、スタッフが常駐していると、もしもの時に助けが求められるため、居場所として機能することができる。

また、近くに公園があることも居場所としての活動をできている要因の一つであると考えられる。コロナ禍になり、主な活動の場所は、建物の外の部分と近くにある公園になった。お菓子や食品などを渡した後の活動の場は公園になり、活動時間の大部分を公園で過ごしている。公園では、ただ遊ぶだけではなく、お正月であれば、羽子板や凧に絵を描いたり、夏であれば水遊びをしたりなどして、交流を大切にしている。コロナ禍になり、室内での活動は密になってしまうため、外で活動できる場所が近くにあるということは、居場所として機能することの大きな要因になり得る。

2節 参加者の特性

かたろう食堂の、お菓子や食品の配布など（②配布型と⑥体験型の組み合わせ）と外遊びの活動は、参加者の対象を子どもに限定している。そのため、子どもに焦点を当てた活動を企画することができ、居場所としての活動をすることができている。

また、参加者は子どもに限定しているが、地域の居場所ともなっている。かたろう食堂は、企業だけでなく、地域の方からの支援が多い。夏には、地域の方から寄付してもらったトマトの苗を、植木鉢に植え替える活動をしたことがある。その際には、寄付してくださった方が、植え替えの指導をしに来てくださった。このように、参加者は子どもに限定していても、地域

の方が支援する側に立つことによって、地域の居場所となっている。また、名古屋市のまちづくり活動の助成事業として、学区の団体と協力して、スタンプラリーを開催したこともある。

ゼミ活動でインタビューした食堂のうち、駄菓子屋さんを運営している食堂、「つなしょ」というところがある。その駄菓子屋さんの店番を、老人ホームの方々にしてもらい、駄菓子を買いに来る子どもたちの相手をしてもらっている。こう仕組みにより、自然と多世代交流の場になることが、子ども食堂の魅力の一つである。さらに、①会食型を運営している食堂で、地域の独居の高齢者の方に調理をお願いしている食堂がある。そこの運営者の方は、支援する側になってもらうことで、必要とされていることを感じてもらうと同時に、結果的に、居場所を提供していることになる。このように、対象は子どもに限定されていても、仕組みを工夫することによって、地域の居場所として機能することができる。

3節 運営者と参加者の人数

子どもたちを公園で遊ばせる際、大人が一番気にすることは、子どもが危険なことをしていないか、自分たちの目が届く範囲に子どもたちがいるかどうかだ。これは、子ども食堂の運営者にとっても同じことである。外遊び（③交流型）の活動ができるかどうかは、近くに外遊びができる場所があるとともに、子どもたちを見守る大人がいることが必要となってくる。

以下は、コロナ禍のかたろう食堂のお菓子や食品の配布など（②配布型と⑥体験型の組み合わせ）の参加人数の記録である。なお、2020年3月4月の活動時は、外遊びの活動を行っていないため、また、11月12月は大人を含めた記録だったため、グラフからは除外してある。



以上19か月の1回あたりの参加人数の平均は47人である。このうち、外遊びに参加する子どもは、3分の2ほどである。つまり、平均31人が外遊びに参加している。スタッフの人数の記録はなかったが、平均5人ほどで運営している。つまり、大人1人当たり6人の子どもを見ていることになる。また、公園にはスタッフだけでなく、子どもたちの親御さんも来ているため、多くの大人が子どもたちを見守る体制ができている。このように、子どもた

ちを見守ることができる大人がいることが、居場所としての活動ができている要因の一つであると考えられる。

4節 自治体との連携

かたろう食堂は、区役所と緊密に連携している。また、区政協力委員や民生委員、社会福祉協議会、学校とも連携している。さらに、フードパントリーに関して、支援が必要な方につないでもらうために、児童相談所や保健センターとも連携をとっている。

先ほどのむすびえの調査によると、「こども食堂での困りごと（※複数回答）」という問いでは、「必要な人（貧困家庭など）に支援を届けること」（60.8%）に次いで「感染拡大の不安・感染防止の対応」（47.8%）、「運営資金の不足」（43.5%）が多く挙げられている（NPO 法人全国こども食堂支援センターむすびえ 2021：11）。第2波が起きた2020年9月に行われた調査では、「どうやっても、感染するときはする。この事実が現実になったとき、ただのボランティア団体にはなんの保証も後ろ盾もないので、ただ批判などに晒されるだけで誰も助けてはくれない。それがわかっているだけに、踏み出すのはリスクが大きすぎる。今までの信用や好印象をぶっ潰すことになるから。少なくとも帯広市では、こども食堂ぜひ必要だからやってください！などという人はいないにもかかわらず『勝手にやっていること』という認識なのだから。大多数の市民は。行政の後ろ盾がない、支援がないということは、市民活動は容易に潰れる。コロナ禍でボランティア活動の限界を感じざるを得ないのが現実だ。」という回答があった（NPO 法人全国こども食堂支援センターむすびえ 2020：8）。

子ども食堂を運営しているのは、市民団体やNPO法人など、ボランティアである場合がほとんどである。「ウイズコロナ」時代になっても、感染対策に終わりはなく、運営者は常に「感染者を出してはいけない。」「感染を広げるようなことはしてはいけない。」という恐怖と戦っている。そこで、自治体の後ろ盾があったら、運営者の方は活動がしやすくなるのではないか。

ここで、愛知県豊田市の取り組みを見ておこう。豊田市のある子ども食堂にインタビューしたとき、自治体との連携について下記のことを指摘していた。

「豊田市の総合福祉相談課が、年に2、3回研修を開いてくれている。研修内容は料理関係や手洗いなどである。また、コロナ禍で子ども食堂を再開するために、ガイドラインを作成してくれた。また、食材の支援をしてくれる団体を紹介してくれたり、豊田市のわくわく事業から支援金をもらったりしている」（作ろう！食べよう！遊ぼう！子ども食堂の運営者の方への zoom インタビュー 2021年7月24日）。

このように、自治体の後ろ盾があると、運営者の方の不安が少しは軽減される。実際に、豊田市は「一安心安全な運営のために一新しい生活様式の子どもの食堂運営ガイドブック」というものを作成している。このガイドブックには、開催の決定から、開催準備、開催当日の気を付けるべきことなどが書かれている。さらには、チェックリストも作成しており、子ども食堂と自治体が密に連携をとっていることがわかる。自治体との連携が要因のすべてとは言えないが、ゼミ活動でインタビューさせてもらった豊田市の子ども食堂2か所は、両方とも会食形式を再開できている。

第3章 居場所として機能するためのさらなる工夫

かたろう食堂は、コロナ禍が始まった2020年3月に、すぐに活動形態を変化させ、フードパントリーだけでなく、居場所を確保するための活動を始めた。子どもたちの状況を把握するとともに、子どもたちに居場所はここにもあるよと伝えるためであった。かたろう食堂は、場所を提供するだけでなく、主体的に活動に関わってもらうために「子ども会議」という子どもが主体の活動を始めた。チラシには、「あそびやかたろうのおもしろいこと、ルールなどを相談し、みんなでかたろうのことを決めるのが、こどもかいぎです。みんなが安心して過ごせる場所（かたろう）を一緒につくっていきませんか?」と書かれている。子ども会議では、子どもたちで話し合い、次回の活動時の遊ぶ内容を決めている。そのきっかけは、コロナ禍で「外遊び応援隊」を続けてほしいという子どもがいて、今度会議で聞いてみると、「僕も会議に出たい!」といったことである。その時は、大人への要望書を書いてもらう形になったが、この出来事がきっかけで、子ども会議が始まった。子ども会議では、いいことがあっても発言できない子もいるため、大人がフォローをしながら行っている。子ども会議で決まった遊びは、当日、子どもたちが運営し、実施している。子ども会議について、かたろう食堂の運営者の方は次のように話している。

「私が、子どもアドボカシーという、子どもの人権を尊重するという勉強をして、子どもの意見を尊重した場所づくりとか時間とかというのが、すごく大事ということを学んだんだよね。大人が勝手に決めたルールの中での子どもの生活や子どもの心って、すごく窮屈というか生きづらさを感じているということを知って、子どもの声を生かした、子どもの声による、子どもの場所づくりをしなくてはいけないというのがこの課題だと思い、「子ども会議」というのを開いて、子どもがここを運営していく、作り上げていくことが大事なんじゃないかなと思い、「子ども会議」をやった感じかな。最初の食堂を始めたときは、ルールは大人が全部決めちゃったんだけど、実際に自分たちが決めることで守っていかなくちゃいけないっていうのを、学ぶよねっていうことはあった。」（かたろう食堂の運営者の方への対面インタビュー、2022年1月13日）

子どもたちに、活動に主体的に関わってもらうことで、より子どもたちの居場所となっている。さらに、2020年9月から始めた対象者を限定していないフードパントリーでも居場所として機能するような活動を模索している。このフードパントリーは、登録した地域の高齢者や保護者が受け取りに来る。この活動は、渡す食材が多く、時間が限られているなどの理由から、貧困対策に重きを置いていた。しかし、片平学区で開催した際、お茶などを飲みながら話す時間を設けたら、スタッフと食品を取りに来る人とのつながりだけでなく、母子家庭のお母さん同士のつながりができた。今後は、このような時間を設け、この活動の参加者の居場所としても機能していけるように工夫したいと考えている。

終章 アフターコロナ時代の子ども食堂のあり方を求めて

ここまで、かたろう食堂がなぜ居場所として機能しているのかについて見てきた。開催場所、参加者の特性、運営者と参加者の人数、自治体との連携など、様々な要因が組み合わさっ

て、居場所として機能していることがわかった。

今現在、日本では、オミクロン株が猛威をふるっており、社会活動に制限がかけられている。子ども食堂も対応を迫られており、①会食型を再開できていない食堂も多い。そのような食堂は、フードパントリーなどの②配布型の活動を行っている場合が多く、以前のように、居場所として機能することが難しくなっている。このように、コロナ禍は、負の面も多いが、それがあつたから見えてきたこともある。それは、支援すべき家庭の存在だ。子ども食堂は、コロナ禍前から、対象を限定していない場合が多かった。そこに、新型コロナウイルスが流行し、本当に支援すべき存在が浮き彫りになった。これから、「アフターコロナ」「ウィズコロナ」時代になり、居場所として機能していくことに重きを置く食堂も増えるだろう。しかし、支援すべき存在を見放すことはできない。そこで、私は2つの活動形態を提案したい。

1つ目は、コロナ禍前のように①会食型を行う活動形態である。①会食型のメリットは、1つの活動で、貧困対策、居場所の2つの目的を果たすことができる点である。しかし、①会食型は、室内で十分な感染対策をとることができる食堂に限られる。

2つ目は、②配布型と③交流型、④学習支援型、⑤相談会型、⑥体験型の組み合わせである。活動を組み合わせることによって、貧困対策、居場所の2つの目的を果たすことができる。しかし、かたろう食堂のように、②配布型と外遊び（③交流型）の活動を行うには、上述した通り、スタッフの確保が課題である。そこで、筆者は、冒険遊び場（プレーパーク）の要素を取り入れていくことを提案したい。

冒険遊び場（プレーパーク）は、「すべての子どもが自由に遊ぶことを保障する場所であり、子どもは遊ぶことで自ら育つという認識のもと、子どもと地域と共につくり続けていく、屋外の遊び場である。」（特定非営利活動法人日本冒険遊び場づくり協会、2021年3月）と定義されている。1943年にデンマークで誕生した「エンドラップ廃材遊び場」が原型となっている。1973年に、欧州での取り組みを紹介した「都市の遊び場」を、建築家の大村虔一さん、元英語教員の璋子さん夫妻が翻訳し、日本に紹介した。そして、1974年、佐賀県唐津市に国内初の冒険遊び場が誕生した。その後、1979年に行政と市民による協働運営で世田谷区の国際児童年記念事業として、日本初の常設の冒険遊び場「羽根木プレーパーク」が誕生した。冒険遊び場の活動団体数は、1998年に57団体だったが、年々増加している。2020年度は、458団体に上っている（「第8回冒険遊び場づくり活動団体活動実態調査」）。

埼玉県川崎市で「子ども夢パーク」「フリースペースえん」の運営を行っている西野博之氏は、「子ども夢パーク」内にある冒険遊び場について次のように語っている。

学びっていうものの中に、実は、私たちが大きく提起しておきたいのは「遊び」の要素が含まれているということですね。言い方を変えると「遊び」の中から学ぶということ。「遊び」を通して学ぶ。私たちNPOの理事に天野秀昭という日本で最初のプレーリーダーがいますが、彼は「教育」に対して「遊育」という言葉をつくりましたね。遊び育つ。ストレスを溜めている子どもたちが、「やってみよう」ということに挑戦できる、禁止をもたない遊び場をつくろう。木に登りたいんだから登らせてよ、運悪く足を滑らせて骨折しちゃった、しょうがないじゃん俺がやりたかったんだもん。「怪我と弁当は自分持ち。」自分で責任とるからさ、自由に遊ばせてよ。自分の責任で自由に遊ぶ。（西野博之、2019：90）

つまり、冒険遊び場（プレーパーク）では、子どもたち自身の責任で、自由な発想で遊ぶことを通して、「学ぶ」ことができる。さらに、西野氏は「学び」について次のように述べている。

学びってなんでしょね。私たちは遊びが育む力として、今はやりの「非認知能力」を高めるってことに注目しています。つまり、数値化されない力、人間として生きていく上で必要な力を育てていく。これは遊びが持っている力ですよ。（西野博之、2019：94）

また、柳下換氏は、この文献の中で「学び」について次のように述べている。

居場所の中で学びを保障し続けていくということが、教育現場にとっては少々厳しい言い方になるのかもしれませんが、本来、学びがあると思われている、たとえば、学校のような場所において、本来の学びが衰退しているとか後退しているのだとすれば、そういう現場に対して、本来の学びとはこうしたものなんだということを伝えていくという、1つの運動的な側面も持っているのではないかという点です。（柳下換、2019：115）

少し話はずれたが、外遊びに、冒険遊び場（プレーパーク）の要素を取り入れると、子どもたち自身が責任を持って、主体的に自由に「遊ぶ」ことになる。それが、本来の「学び」であり、子どもたちの成長につながる。子どもたちが主体的に自由に「遊ぶ」場ができれば、家庭、学校に次ぐ第3の居場所として機能するのではないか。

子ども食堂のような、社会的インフラの重要性は以前から指摘されている。社会的インフラとは、「図書館や公園、遊び場、学校、運動場、市民農園など集団生活を条件づける物理的な場のこと」である（エリック・クリネンバーグ 2021：11）。コロナ禍になり、人々が集まる機会が奪われ、多くの人々が孤立した。また、独居老人の孤独死の問題はコロナ禍前からある。さらに、今日、異常気象と呼ばれるものは、毎年のように起こり、私たちの生活は危険にさらされている。このようなときに、強力な社会的インフラがあると、危険を回避することができる可能性が高くなる。

コロナ禍前から、子ども食堂の活動目的と活動形態は多種多様であった。それが、コロナ禍を経験し、より多様な広がりが出てきた。本稿は居場所機能に焦点を当てたが、貧困対策に重きを置く食堂もあるだろう。しかし、大事なことは、子ども食堂が立地する地域の社会経済状況の中で、参加する子どもや親御さん、運営者、ボランティアスタッフ、そこにつながっている関係者が、自分たちが実現しようとしていることは何かについて改めて気づくことだろう。そして、それを実現するために試行錯誤しながら、工夫を重ねていることである。コロナ禍は、この原点を再確認する機会となった。これからも、子ども食堂に継続的に参加し、そういった思いを持った人とつながり、一緒に模索していくつもりである。

【参考文献】

大澤朋子, 2019, 「社会的養護と子どもの居場所」『実践女子大学生生活科学部紀要』56：61-

68

エリック・クリネンバーグ著, 藤原朝子訳, 2021, 『集まる場所が必要だ：孤立を防ぎ、暮

- らしを守る「開かれた場」の社会学』, 英治出版
- 柳下換・高橋寛人編, 鈴木健・尾崎万里奈・西野博之・石井淳一著, 2019, 『居場所づくりにいま必要なこと—子ども・若者の生きづらさに寄りそう』, 明石書店
- 権法珠・岸本美紀・蘇珍伊・榊原琢也・高柳りえ・本景子著, 2021, 『岡崎市における子ども食堂の実態と課題—子ども食堂と社会福祉協議会の連携に焦点をあてて—』
- NPO 法人全国子ども食堂支援センターむすびえ, 2021, 「こども食堂の現状 & 困りごとアンケート vol.5 結果報告」(2021年12月21日にアクセス)
- 豊田市, 2021, 『—安心安全な運営のために—新しい生活様式の子ども食堂運営ガイドブック』
- 特定非営利活動法人日本冒険遊び場づくり協会, 2021, 「冒険遊び場の定義」(2022年1月13日にアクセス)
- 帯金真弓, 2017, 『「禁止なし」を守る 大人も知恵』, 朝日新聞
- 成元哲・牛島佳代, 2020, 「食卓をめぐるソシアビリテの誕生と変容」『中京大学現代社会学部紀要』14-2: 113-126